

ひどすぎると納得するんじゃないかな、おれがこう言えば——
午後五時のお茶の時間に朝めしを食うこともしょっちゅうで、
あくる日に夕めしを食うこともある……とね。

第三は冗談が通じないこと。
ためしに一つ冗談を言ってごらん——
あいつはいつも、まじめな顔してだじゃれを聞くんだ。

第四は〈海水浴用更衣車〉が好きなこと。
あいつはいつも、これを持って歩き、
あんなものが景色を美しくしてくれると信じきっていやがる——
どうも首をかしげたくなくなる感情の持主なんだ。

第五は〈野心〉。そしてそのあとは、
一つずつ丹念に区別していけばいい——
羽毛があって噛みつくやつと
頬ひげがあって引っかくやつとを区別してな。

普通のスナークはまったく害がないが、
こうしておくのがおれの義務かな——
中にはブージャムも混っているぜ……

——ルイス・キャロル〈スナーク狩り〉

p. 186-188

- 2040 Marjorie Hope Nicolson 『月世界への旅』 高山宏訳 (国書刊行会, 1986年, 世界
幻想文学大系44)

原題: Voyages to the Moon.

「不思議の国」は色褪せてしまったかも知れないし、チェシャー猫はわれわれの
前からその姿を隠してしまった。だが——その笑いはまだ残っている。

p. 362

- 2041 Lilith Norman 『まぼろしの丘』 飯島和子訳 (篠崎書林, 1975年)

原題: Climb a Lonely Hill.

不思議の国のアリスの首が、ヘビのようにのびてしまったときみただと、ジャ
ックは思った。

p. 186

- 2042 Jill Paton Walsh 『夏の終りに』 百々佑利子訳 (岩波書店, 1980年, あたらしい
文学5)

原題: Goldengrove.

「ちょうどそのとき、一頭の子鹿がふらりと通りかかりました。そして、やさし
い大きな目でアリスを眺めましたが、ちっとも驚いたようすがありません。『ほ
らおいで! こっちよ!』アリスはそうやって手をさしのべ、背中をなでてやろ
うとしました。けれども子鹿は、数歩あらずさりしたきり、アリスを見つめなが